

気がつくと、清姫は、布団の中で、寝かされていた……。ハツが傍らに座ったまま、ウトウトと眠っている……。

「ハツ……」

清姫は、声をかけた……。

「お目覚めになれましたか……?」

ハツがあわてて眼を開けた。

「わたしは……?」

「三太や次郎達が、倒れた姫の身体を、ここまで運んで来てくれました……。後で、ちゃんと礼を言わねばいけませんよ。」

「そうか……」

清姫は、そのまま、だまって、節のある天井の木目の模様を眺めている……。

「おめでとугоざいます……。姫様……。今晚は、お赤飯にしましょう……。」

しばらくたって、ハツは言った……。

「……?」

「……。心配はいりません。姫様は、女の身体になられたのですよ……。大人の女には、毎月、このような障りが起ります……。けれど、これで、もう、神殿のお世話は出来ませんね。」

言われて……。清姫は、自分の身体の中で起っている異変に気が付いた……。

……。そうか……。これが、女の身体になるという事か……。

けれど……。わたしは、今、女になったのだろうか？

……。急に、安珍の顔が、心の中に浮かんで来た……。

……。清姫は、今まで感じた事のない息苦しさを覚えた……。

安珍！……。胸が痛い……。